

全国空襲連

会報 No. 3

2011・7・20

全国空襲被害者連絡協議会

共同代表 : 早乙女勝元 中山武敏 荒井信一 前田哲男 斉藤貴男

連絡先 : 〒131-0045 東京都墨田区押上1-33-4 中村ビル102 TEL/FAX 03-5631-3922

年会費 : 個人 1口 2,000円 団体 1口 5,000円

郵便振替 : 00130-8-623364 (口座名: 全国空襲被害者連絡協議会)

E-mail : tokyokusyuzokukai@ybb.ne.jp ホームページ <http://www.zenkuren.com/index.html>

差別なき戦後補償の実現へ 広範な世論の支持と共感 超党派の国会議員連盟結成

6月15日、衆議院第一議員会館で、「空襲被害者等援護法(仮称)を実現する議員連盟」の設立総会が開催されました。民主、みんなの党、共産、社民、無所属の衆参議員16名、代理11名、秘書9名の合計36名が出席し、超党派の議員連盟が発足しました。会長に首藤信彦(民主)、副会長に柿澤未途(みんな)・笠井亮(共産)・服部良一(社民)、事務局長には高井崇志(民主)が選出されました。今後、自民党、公明党などの各党、各会派の議員にも働きかけていくことも確認されました。衆議院法制局第五部(厚生労働委員会担当)部長、同参事も出席し、援護法骨子素案が説明されました。法案の趣旨は、「国の責任において、空襲等による被害者及びその遺族に対する救済処置、被害者の実態調査を行う。」となっています。同総会で、東京大空襲弁護団を代表して、私は、「空襲等民間人戦争被害者の苦しみは現在も継続しており、東日本大震災の被災者の方々の救済、支援と同じように、その救済、補償は、現在の課題である。」と差別なき戦後補償立法の必要性を訴えました。安野輝子大阪空襲原告団代表も「戦争被害受認論を打ち破って、子や孫に平和な日本を手渡したい。」と発言されました。出席の福島みずほ議員をはじめ17名の議員がそれぞれ、立法の必要性和実現に向けて活動していく決意を表明されました。



国会議員連盟の設立総会

名古屋空襲で左目を失われ、顔面、手足に重傷を負われた杉山千佐子さんも、95歳の高齢にもかかわらず、名古屋から車椅子で付き添いの方と参加されました。1970年代から夜行で東京に来て、各議員に立法を訴えたが実現しなかった。議員連盟が発足したことを心から嬉しく思うと発言されました。参加の東京大空襲原告団、原爆被害者の方にも希望の議員連盟発足となりました。差別なき戦後補償の実現には、広範な世論の支持と共感が必要だと思います。平和と人権の確立を求める多くの方々との連帯の環を広げたいとおもいます。

(注) 後日、公明党の赤松正雄氏が副会長に就任されました。(記・共同代表中山武敏)

100万署名あらたに提起 司法と立法府を動かそう

東京高裁11月28日結審・大阪地裁12月7日判決

全国の地域拠点づくりの動向

全国空襲連の地域拠点づくりは、関東ブロックが2回の準備会を経て、6月に第1回会議を開催し、8・14全国空襲連結成一周年のつどいの開催について打合せと各地域の活動状況を報告していました。その他には沖縄が8月11日に集会、東京大空襲訴訟原告団・弁護団、九州・久留米のコスタリカの会が参加します。九州は、今年10月頃にブロック結成を目指し準備中です。なお、静岡、浜松地区なども動きつつあります。

全国空襲連の主な活動日誌

2010年8月14日	全国空襲連結成集会・運営委
18日	「立法化プロジェクト」第2回(原告) (11/18まで7回開催)
31日	個人・団体宛加入要請(個人は随時、団体は一回)
9月 8日	共同代表へお礼とお願い
21日	立法化勉強会(原告)
26日	第1回「未来につなぐ証言」
10月16日	第1回役員会
24日	第2回「未来につなぐ証言」
11月 5日	地域拠点づくり要請
19日	国会議員と懇談会
21日	第3回「未来につなぐ証言」
26日	運営委員の応諾確認
27日	「会報」原稿募集
12月 3日	衆院法制局と打合せ(4月6日まで5回、その後数回)
5日	「会報」1号発行
5日	第2回役員会
2011年1月20日	「会報」2号発行
23日	第4回「未来につなぐ証言」
30日	援護法制定へ行動要請
2月20日	第3回役員会
3月 8日	裁判・立法化集会
10日	議員連盟「呼びかけ人集会」
23日	東日本大震災救援募金の訴え
4月28日	市民の会「集会」
5月 7日	第1回関東ブロック準備会
22日	第4回役員会、第1回運営委
6月12日	第5回「未来につなぐ証言」
15日	第2回関東ブロック準備会
7月 8日	第1回関東ブロック会議
～下旬	法案化実務討議(7月28日まで数回)
20日	「会報」第3号発行
31日	第6回「未来につなぐ証言」
8月 5日	第2回関東ブロック会議
11日	沖縄集会
～13日	総会実務とつどい対策
14日	総会・集い

全国空襲連加入状況

個人について 371名
団体について 23団体

全国空襲連 団体加盟

- ・団体会費納入・加入確認。6月30日現在
- 千葉市空襲と戦争を語る会
- 全国地域婦人団体連絡協議会
- 佐世保空襲犠牲者遺族会
- 全国戦災傷害者連絡会
- 神奈川・東京戦災障害者の会
- 呉戦災を記録する会
- 社会民主党東京都連合
- 大阪空襲訴訟原告団
- 東京大空襲訴訟原告団
- 東京空襲犠牲者遺族会
- JR東労組東京地方本部
- 東京都原爆被害者団体協議会(東友会)
- 平和を願い戦争に反対する戦没者遺族会
- 新聞うずみ火
- 「河童のいる川」製作委員会
- 宇和島空襲を記録する会
- 東京大空襲朝鮮人罹災者を記録する会
- 東京平和運動センター
- 沖縄10・10空襲・砲弾被害者の会
- 平和遺族会
- 青森空襲を記録する会
- 埼玉県平和運動センター
- 神奈川平和運動センター

全国空襲連の役員

共同代表	早乙女勝元(作家)	
	中山武敏(弁護士)	
	荒井信一(学者)	
	前田哲男(ジャーナリスト)	
	斎藤貴男(ジャーナリスト)	
運営委員長	星野弘(東京、原告団)	
副委員長	城森満(東京、原告団)	
〃	安野輝子(大阪、原告団)	
事務局長	足立史郎(東京、原告団)	
〃次長	牛山鈴子(東京、遺族会)	
役員	黒岩哲彦(東京、弁護団)	
	児玉勇二(東京、弁護団)	
	高木吉朗(大阪、弁護団)	
	伊藤章夫(千葉)	
	岩崎建彌(名古屋)	
	東友会(東京)	
顧問	杉山千佐子(全国戦災傷害者連絡会)	
役員会補佐	事務局補佐	柿沼真利
(弁護団から)		水田敦士
	国会担当補佐	内藤雅義
		杉浦ひとみ

佐世保空襲の実態 人間回復へ立法化を

1975年6月29日、「佐世保空襲を語り継ぐ会」によって、第1回の「佐世保空襲犠牲者慰霊祭」が営まれ、「佐世保空襲犠牲者遺族会」も発足した。その後は、両者一体で、犠牲者の追悼、実態調査、語り継ぐ活動を進めてきた。5年前には「佐世保空襲資料館」を開設し、資料や証言を集めている。

その結果

- 1、米軍は、佐世保港と湾岸の85%を占める広大な軍事施設には、ほとんど手をつけず。市街地を焼き払い、日本軍の降伏後は、5万の大軍が上陸し、焼け跡をブルドーザーで踏み潰して資材置き場とし、周りにキャンプを建設して、今なお続くアジア支配戦略を進める大軍事基地を作ったのだった。
- 2、佐世保空襲には、サイパンからのB29、145機を中心に、沖縄からの小型機、中型機を多数発進させ、逃げ惑う市民を標的に機銃掃射、機関砲掃射を浴びせかけている。窮地を脱した市民も、恐怖のために町を離れ、遺体の収容や、負傷者の手当等もできなかった。
- 3、空襲後の軍命令「軍人の遺体は所轄で収容し、士官は市の火葬場で火葬、下士官や兵は所轄で火葬、市民は自分達で、遺体を早く片づけてしまえ」と。しかし翌日になっても市内各所に散乱する遺体を見て、軍は「施設部」(現防衛施設庁の組織)に命じて、市内の遺体を回収し、市の「ゴミ捨て場」に捨てさせた。この地は、そのまま埋め立て、今はコンビニの駐車場になっている。このように市民は戦争によって、敵、味方から差別と暴力にさらされ、多くの犠牲を強いられたのだった。(佐世保空襲犠牲者遺族会・会長岩村秀雄)



中央公園の一角に立つ、佐世保空襲犠牲者、鎮魂慰霊平和祈願の塔(1977. 6. 29建立)

山の手空襲で辛くも死を免れた体験を話す
泉宏さん



未来につなぐ証言

連続公開フォーラム

第3回

生死を分けたレンガ塀

講師・泉 宏さん

都市空襲の恐ろしさを知り、その被害の痛みを分かち合おうと第3回連続公開フォーラム「未来につなぐ証言」が昨年11月21日、東京5大空襲の最後の山の手空襲で被災し、辛くも死を免れた建築家の泉宏さんを迎え、都内の大学研修施設で行われた。

泉さんが山の手空襲を体験したのは1945年5月25日、旧制中学3年の15歳のときだった。3人の兄は兵役に服し、空襲当時、自宅を守っていたのは町会役員で在郷軍人会の副会長だった父と泉さんの2人だった。

「父はあの日、『ちょっと町会の様子を見てくる』と言って出かけました。これが最後の別れになりました。私は必死に逃げ回りました。明治神宮に通じる表参道には猛火が回っていて進めず、神宮外苑方向に逃げ場を変えましたが、そこにも火と煙が回って進めなくなり、運よく防空壕が見つかり飛び込みました」

「その後、強制疎開跡地に身を隠しましたが、跡地にレンガ造りの塀がなかったら、私は焼け死んでいました。朝になり、その塀の外側に身を寄せ合った焼死体があるのに気が付きました」

板子1枚下は地獄。漁師の言い伝えである。熱風を遮断した塀の内側にいたことが泉さんの生死を分ける境目だった。

「子どものころ、通学するのに青山通りを歩いて、表参道の交差点を曲がるとき、明治神宮に向かって最敬礼するのが習慣でした。空襲の後、通い慣れたその交差点わきには、黒焦げの死体が山のように。テレビで放映されるアフガン、イラク戦争の空爆を見ると、あの爆撃の下で逃げ回っている人たちのことを、私は私自身の空襲体験と重ね合わせてしまいます。若い人たちも想像力を働かせてこのこと考えてほしい」

泉さんはこう訴えて締めくくった。泉さんの死生観をも変えた山の手空襲。体験談には実感がこもっていた。

(文責・都市空襲研究会)